

◆巻頭言◆

「激動の時代に向かって」

日本ナレッジ・マネジメント学会 理事 進 博夫



先日の実践ナレッジ・イノベーション研究部会（部会長：廣瀬文乃理事立教大学助教）でのこと、この場に自ら参加する企業や団体の第一線の人たち有志のパネルで部会への参加動機などが語られた。「かつて時代をリードした会社も先行き不透明で、この場で何かを掴めればと参加した」「社会が硬直化している。打破するきっかけを掴みたい」。

最近、世の中の閉塞状態が続いている。予想も出来ない事態が世界で起きている。国際社会が大きな変わり目にあり日本もその渦中にあるのではないかと筆者自身が考えているために先のような皆さんの言葉にやや過敏に反応したのかもしれない。

そして11月30日の早稲田大学で開催された国際シンポジウム、山崎専務理事モデレーションの最終パネルでは様々な刺激的状況の話題が登場したが、それらの捉え方や解釈はともかく、課題としては筆者も共有するところが多かった。

日本では失われた数十年からの脱却が進まない一方で、世界では近現代の世界をリードしてきた英米に想像もできなかった事態が生じている。英国では当時の政権の安易な国民投票で EU 離脱が決まり、米国ではトランプ・ショックが起こった。現状に不満を鬱積させた大衆の数はマスコミや有識者の事前予測をはるかに上回り、それらの不満が顕在化した結果である。英国では、東欧や中東の移民難民が地方で急増しコミュニティを変質させる事態もあり、元々大陸国とは距離を置く EU からの離脱を選択した。米国では、グローバル化を図る企業の最適地生産で職を失った工場労働者や、中南米の低賃金労働者に職を奪われた貧困層など、資本や人の移動の自由の弊害の被害者たち。2002年にリチャード・フロリダが顕在化させたクリエイティブ・クラスの台頭の陰で、無縁の下層白人の不满にトランプ氏独特のアジテーションが火をつけた。かつては製造業で世界をけん引した英米であるが、製造工場の中心が低コストのアジアや新興国に移り、金融・IT、サービス産業にシフト。金融もITも容易に国境を越え、グローバルに勝者への富の集中が顕著である一方、地域に取り残された人たちにはますます格差が広がり、社会構造の二極化が進む。

これらの大衆の不满が既存エスタブリッシュメントへの反発と相俟って、統合ヨーロッ

パや自由と平等、といった理想よりも変化を要求する。理性よりも感情、英米の二大先進国が自国第一主義を採り、保護主義を叫ぶリーダーに変化を託す。他国への波及も避けられず、理念が後退し殺伐として世界に大きな混乱が生じることは避けられそうにない。

顧みれば 17 世紀、デカルトの提唱した心身二元論と分析的論証は、近代を象徴する合理的科学が飛躍的進歩を遂げる上での思想的背景となった。そして 20 世紀は輝かしい科学技術の時代となり、技術革新により産業が拡大し、先進国では成長と豊かさを享受してきた。しかし西欧合理性は輝かしい成果を人間社会にもたらす一方で、技術偏重、産業優先による公害や自然破壊が大問題となる。喫緊の課題から解決の努力は行われているものの、人や自然との調和は二の次で、地球温暖化の対策や核のゴミの解決策は先送りが続く。

世界の国々が次々に近代化し経済成長の果実を享受していくバラ色の夢も描かれた。しかし今や先進国は成長が鈍化して行き詰まり、英米での大衆の不満爆発の政治的混乱状況が生じている。日本も表面的な混乱こそないが、格差社会は確実に広がっているようだ。

今、法政大学教授の水野和夫氏は、近代の成長のシステムが機能不全に陥りつつあり、資本主義の終焉が迫っていると警鐘を鳴らし、近代の「より早く、より遠く、より合理的に」から「よりゆっくり、より近く、より寛容に」への思考のベースの転換を提案する。フランスの叡智といわれるジャック・アタリ氏は、今後の 21 世紀の世界が米国の衰退に始まり、超紛争の段階などを経て、数十年後、最後の 5 段階目には世界の協力と調和による「超民主主義」が登場し、そこでは「利他主義」の精神が有効である、と語る。

来年以降、激変が待つのは確かだろう。それに向けて学会員として何が出来るか、妙案はない。あくまでも共に知を磨く地道な活動を積み上げ深め広めていく以外になさそうだ。

時代と共に変化する IT 技術、現在では IOT や AI は社会のシステムのスマート化に役立つ奥深く影響度も大きい技術である。ただ雇用拡大への貢献度は未知数であり、奥深いからこそ悪用の危険性もある。そのような観点から注意深く研究していく意味があろう。

先日の組織知の形成・持続研究部会（部会長：高山千弘理事エーザイ執行役員知創部長）でのヤフー水野貴之氏の発表で、株主利益優先の企業評価に代わる多様なステークホルダー利益を示す指標の一大開発プロジェクトが進行中とのことである。非常に興味深い。

利他主義がベースとなる知識創造理論を軸に実践する高山部会とその兄妹部会ともいえる廣瀬部会をはじめ、多様な企業・団体組織や多様な地域コミュニティの人たちの叡智を生かし、共に学び、創っていく。このような場を通じて培われた絆は、混乱する時代には非常にレジリエントで、新たな社会に向けて有効であろう。